

仲井慧悟(京都大学大学院教育学研究科)

ハンナ・アーレントは『人間の条件』(初版 1958 年)において、「政治的思考の中心的なカテゴリー」として「出生性」(natality)という概念を提示した(Arendt 2018: 9)。このことが、古代ギリシア以来の、また、アーレントに直接的影響を与えたマルティン・ハイデガーに至るまでの、西洋哲学史における「死」および「可死性」(mortality)という人間の有限性への注目の支配的な状況に照らしてみると特異なものであったということは、これまで指摘されてきた。

しかし他方、アーレントの出生性概念が、生物学的・身体的な出生を、すなわち精子と卵子が結合し、胚が育ち、やがて胎児が子宮から外へ出ていくという一連の過程を指す出生を含んだものではないこともまた、しばしば指摘されてきた。

このことは第一に、アーレントの出生性概念を生物学的な「出生」(birth)と同一視するのは誤読であるとするアーレント研究者らの主張にみられるといえる。たとえば、青木(2021: 26)は natality と birth の混同が現在でもみられることに注意を促している。このような方向性での「出生性」研究は、アーレントの出生性概念のもつ公的な世界への「第二の誕生」としての意味を強調する一方で、生物学的な出生を〈単なる……にすぎない〉という言い方で、ともすれば低く見積もる傾向にあるともいうことができる(たとえば、森川(2020: 70)や青木(2021: 24)にそうした表現がみられる)。

そうした読解はアーレント解釈の妥当性を高めることにはなるが、出生性という概念をアーレントの概念としてではなく、〈人間は生まれたものである〉ということについて何事かを考えるための概念として捉えるならば、必ずしもアーレント解釈にこだわる必要はないのであり、生物学的出生をも重要な論点として考慮に入れてもよいように思われる。

そこで第二に、同様にアーレントの出生性概念に生物学的出生の含意がないことを指摘するものとして、フェミニズムのアーレント読解に注目することができる。そのような読解の概観を与えるファニー・セーデルベックは、「アーレントが(政治的)出生性についての最高の思想家であるとするれば、そうであるがゆえに彼女は真に(身体的(embodied))出生の思想家ではない」とし、出生性概念は「奇妙なまでに抽象的で非身体的な、そして出生のジェンダー的地平から遊離した」ものであるがゆえに、アーレントは「産み出されることの身体性や母親の行為主体性を消去する、旧来同様の伝統を固定化している」という(Söderbäck 2019: 60)。

このようなアーレント批判の上に立ちながら、リュス・イリガライ、およびアーレントとイリガライに大きな影響を受けたイタリアのフェミニスト、アドリアナ・カヴァレーロという二人の思想を基盤として、出生の哲学と呼ぶことのできる一連の著作が英語圏を中心として発表されてきた。それらは、「母親殺し」に基づく家父長的・男性中心的な西洋文化・思想を批判するものであり、「母親としての女の忘却」と「母親以外のものとしての女の忘却」という、女性の二重の抑圧状況を解消に向かわせようと努めてきた(Söderbäck 2019)。

なかでも、本発表において注目されるのは、母親の存在を取り戻すことによって帰結する、〈人間は生まれ、守られ、育

てられたものであるがゆえに、独立自存ではなく、他者に依存し、他者との関係性を持ち、同時代的・世代的な関係構造のうちに繫縛されたものである〉という人間把握の仕方である。このような見方は、——アーレントの出生性概念の政治哲学的含意を認めるか否かに相違はあるものの——クリスティーナ・シュースやアリソン・ストーンの研究にみられる(Schües 2016; Stone 2019)。

アーレントの出生性概念は、教育学においても一定の注目を集めているが、そこでは上記のようなフェミニストによる批判は踏まえられておらず、もっぱら、出生性に由来する子どもの新しさ・革新性が強調される。しかし、小玉(2020)が指摘するように、子どものもつ革新性を強調することによる子ども中心主義が、過去と未来の架橋として教育(者)をみるアーレントの視点を失うことになってはならない。子ども中心主義・生徒中心主義に対する批判としては、たとえばそれが持続可能な開発のための教育の要件として積極的に推進されている一方で、学習者の自己中心性を肥大化させ、持続可能性に反することになるとの指摘もある(Komatsu et al. 2021)。生物学的出生を考慮に入れることで、自己の他者依存性を含んだ出生性概念は、このような子ども中心主義批判を乗り越えた出生性に基づく教育論を提示できる可能性がある。そのとき、アーレントの政治的出生性概念を拡大しつつ、その教育論も拡大的に理解することになる。教育学の議論の素地をなす人間理解を出生性概念によって提示するための基礎的な考察が本発表の目的であり背景である。

本発表では、フェミニストによるアーレントの出生性概念に対する批判に端を発する出生の哲学の思潮を紹介し、論点を整理する。そうして、政治的出生性とともな生物学的出生性を考えるとすればどのようなことが論点になりうるか、また、その関係はどのように考えられうるかという議論の起点形成に寄与したい。

【引用・参考文献】

- 青木崇(2021)。「赤子はどこへ生まれるか——可死性と出生性、ハイデガーとアーレント」『Arendt Platz』6: 23-34。
- 小玉重夫(2020)。「教育学——過去と未来を架橋する出生」日本アーレント研究会[編]『アーレント読本』法政大学出版社、289-297頁
- 森川輝一(2020)。「はじまりと出生——自由の原理と、その困難」日本アーレント研究会[編]『アーレント読本』法政大学出版社、69-77頁
- Arendt, H. (2018). *The Human Condition*. 2nd edition., Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Komatsu, H., Rappleye, J., & Silova, I. (2021). "Student-Centered Learning and Sustainability: Solution or Problem?" *Comparative Education Review*, 65 (1): 6-33.
- Schües, C. (2016). *Philosophie des Geborensseins*. Erweiterte Neuauflage. Freiburg/München: Karl Alber.
- Söderbäck, F. (2019). Birth. In: R. T. Goodman (ed.), *The Bloomsbury Handbook of 21st-Century Feminist Theory* (pp. 59-79). London/New York: Bloomsbury.
- Stone, A. (2019). *Being Born: Birth and Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.